

# 聞診について

峯尚志



# 聞診とは

## 聴覚と嗅覚からの情報収集の方法

- 声のトーンや発語が明瞭か、応答がスムーズかなど言語・音声から情報を得たり、咳や呼吸音、腸の蠕動音、または心音などを聴診することで状態を把握する



# 匂いを聞く

体臭や吐物や下痢、痰などの分泌物  
の臭気も参考にする



# 香りを聞く『聞香』

香の世界では、香りを嗅ぐことを聞香と称する。聞香とは、文字どおり、香炉から「香りを聞く」ということであり、嗅ぐのとは異なり、心を傾けて香りを聞く、心の中でその香りをゆっくり味わうという意味。微妙な香りの違いを耳を澄まして聞くように嗅ぎ分ける、香りのマイスター。患者さんの声なき声を聞くというのも聞診といえる。



# 日常との違いを知る

認知症の患者さんにおいては、会話の受け応えがしどろもどろであったり、まとはずれな返事であることはよくみられる。しかしそんな人であっても保たれた自我から発せられた言葉であるかを区別することが大切。たとえば「昨日、誰々さんが会いに来てな」と話す○○さんは、実はすでに他界した人であったとしても、本人の中でその記憶をきちんと受け止めて話されている場合は、その人にとって危険信号ではない。一方、自我を失って、妄想の世界から言葉を発しているときは、病状の進行あるいは、何らかのライフイベントの影響をさぐる必要があり、目つきなどとともにいつもの声とトーンが違うときは注意が必要となる。



# 日常との違いを知る

認知症の患者さんにおいては、会話の受け応えがしどろもどろであったり、まとはずれな返事であることはよくみられる。しかしそんな人であっても保たれた自我から発せられた言葉であるかを区別することが大切。たとえば「昨日、誰々さんが会いに来てな」と話す○○さんは、実はすでに他界した人であったとしても、本人の中でその記憶をきちんと受け止めて話されている場合は、その人にとって危険信号ではない。一方、自我を失って、妄想の世界から言葉を発しているときは、病状の進行あるいは、何らかのライフイベントの影響をさぐる必要があり、目つきなどとともにいつもの声とトーンが違うときは注意が必要となる。



# 頭ぼーと血虚証

健常者であっても、頭が働かず声が出てこないことがある。これは血虚証といって血の栄養作用が不足しているときにボートして頭が働かない時にでてくる症状。睡眠不足やコロナ後遺症のブレインフォグなども血虚証の側面を考慮する必要がある。



# 頭弱々しい声

いつもより弱々しい声のときは、気虚証などの気のエネルギー不足が疑われる。人参湯や六君子湯などの補脾の処方が必要となる。



# 怒気を含んだ声

声の調子に怒気があるときには、肝気鬱結というストレス状態をかんがえる。

抑肝散、四逆散などの柴胡剤の適応を考える。

。



# 陰虚陽亢による怒気

痩せて元気がないはずなのに、妙に声が甲高くイライラ感の強いとがった声の場合、陰がさらに虚して化熱した陰虚陽亢という病態を考える。

。



# 声なき声を聞く

患者さんが何もいわなくても、患者さんの心の声が聞こえてくることがある。このような聞く力もまた聞香に通じる聞診の極意といえる。



# 匂いを聞く



# まずは寒熱をとらえる

一般的には淡白な匂いは虚証、寒証を濃厚な匂いは実証、熱証に捉えられることが多い。まずは寒熱を大きく把握することが重要。



# 口臭

口臭で濃厚な匂いであれば胃熱と弁証し、黄連を含む清熱剤たとえば半夏瀉心湯を択する。胃食道の逆流による場合は理気作用のある枳実を含む方剤たとえば茯苓飲を択する。食物の志向や食べる時間帯も重要で、寝る前にお腹いっぱい脂っこい食事をとると、胃熱が生じ安く口臭の原因となる。



# 喀痰

喀痰において粘って色の濃い生々しい匂いの痰は実熱証で清肺湯などの処方、薄くて量が多くて、水っぽい痰の場合は、裏寒証として小青竜湯や、苓甘姜味辛夏仁湯などが適当となる。



# 婦人の帯下

実際に嗅ぐ機会は少ないあ、患者さんや母親などの家族が実際に嗅いだ印象を教えてください。臭気が強く粘った帯下の場合は濕熱証として五淋散などの処方が適応、臭気があまりなく、さらさらとした水のように量が多い場合は陽虚水滯、裏寒証として苓姜朮甘湯や附子理中湯などの温性の方剤が適応となる。



# 吐物

臭気が強くネバネバした吐物は、黄連を含む半夏瀉心湯などの方剤が、喉が渴いて水を飲むけど、その後噴水のように薄い水液を多量に吐く場合は、水逆を治す五苓散の適応となる。また実熱証のときには、瀉方として大黄を含む瀉心湯や承気湯類の適当となる場合もある。



# 大黄による瀉方

大黄剤は解毒剤としても用いられ、たとえば下痢していても便の臭気が強い実熱毒素型の細菌感染症では、下痢をしていても敢えて大黄剤で下すことによって、ウイルスを速やかに体内から除き解毒する治療を選択すべき治療があるのです。



